

---

# 遠想

彩瀬姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遠想

### 【Nコード】

N5234H

### 【作者名】

彩瀬姫

### 【あらすじ】

彩瀬姫の短編集。恋愛モノ中心。表題作「遠想」「雨の日の音楽室」「罪。それは僕の名前」他

はじめに。

こんにちは、彩瀬姫です。

今まで短編は、一作一作投稿していたのですが、このペースで行くと凄く増えそうな気がするので、一時的に短編集としてまとめることにしました。

BLもNLも一緒に、この短編集に書きます。

但し、「響×大翔」シリーズはこのまま一作ずつ投稿。

注意書きは前書きにしっかり書きたいと思います。

違うジャンルもあるかもしれませんが、恋愛としておきます。

ほぼ一話完結で書いて行きたいです。

これからも、彩瀬姫をよろしくお願いします。

## 遠想

遠くへ飛んで行くのは、僕の声

君には聞こえていないかもしれない

鳥のように、遠くまで飛んで行ければよかった

君の元に言葉を届けに行くから

知らなくてもいい

ただ僕自身の自己満足だとわかっているから

分からなくてもいい

この想いは僕のものだ

僕の声

届くといい

少しでも僕を思い出してくれるのなら

それでいいから……

「何書いてるんだ？」

僕が机で書いているノートを彼は覗き込んできた。

あまり見られたくないと思ったけど、今の僕にはそこまでの元気

も気力もなかった。

「うん？詩……かな？」

曖昧に答えておく。

僕のノートに小さく書かれた短い詩。

「お前らしくない詩だな。なんとというか、暗い。いつもビャービャー  
ー煩いお前はどこへ行ったんだ？」

茶化した様子のない彼の声。

不器用な手つきで僕の頭を撫でてくれる。優しいという言葉があ  
っているか分からないけど、涙が出るほど暖かいものだ。

「ここにいますよーだっ。お前、煩いからあっち行けよ。今は少し  
だけ一人でいたいから……お願い」

初めの言葉は彼を茶化したつもりだったが、最後の言葉は自分  
らしくもない弱々しい声で彼に縋ってしまった。

「ああ……分かった。何かあったら言えよ」

「うん」

窓の外を見ると、青い空、雲すらない、快晴。  
だけど、僕の心の中はずっと雨が降り続ける。

真黒な雨が僕の視界を閉ざしている。

……もし、僕の視界が 心が晴れたのなら、

それはきつと新しい、『僕の始まり』……と、信じたい。

窓から視線を外した僕は、

ゆっくりとノートを閉じた。

## 雨の日の音楽室（前書き）

ラブとまでいきませんが、「ボーイズラブ」要素があるので、苦手な方はご注意ください。

## 雨の日の音楽室

うわぁー……。音楽室にリコーダー忘れたぁ……。

明日、リコーダーのテストがあるから、家を持って帰ろうとしたら探してもなかったのだ。今日授業で使ったのを思い出し、三階にある音楽室へ歩いていった。

雨、すごい降ってるなぁ……。

窓の外を見てみると、雨が降っていた。風も吹いていて、夏でも少し肌寒い。

僕は雨が嫌いだ。ジメジメしていて、何故か僕を憂鬱な気持ちにさせるから。雨のザーと言う音は雑音にしか聞こえないし、時にその音は僕を惨めにするから。

音楽も同じだ。僕には雑音にしか聞こえない。豊かな気持ちなんかならない。苦手な意識がある僕にとって音楽は苦でしかない。

音楽室に近づくとつれ、雨以外の音が聞こえた。

くぐもった音。

此れは何の音だろうか？

音楽室の前に着き、僕は恐る恐る扉ドアを開けてみた。すると優しく軽やかな、そして楽しそうな音が聞こえてきた。

ピアノの音？

音楽室の真ん中にあるピアノを弾いているのは綺麗な男の人。ピアノの音っていうか、ピアノと一緒に歌っているみたいだ。

暫くひびく聞いていた。

彼は僕の視線に気付いたのか、ピアノを弾いていた手を止め、此方に振り向いた。

僕の存在に気付いた瞬間、顔を真っ赤に染めた。まるで夕陽の様。其の顔を見た僕の方が恥ずかしくなってしまうて、彼に問いかける声に変に上擦ってしまつた。

「あつ、あの……すみません。リコーダー、ピアノの近くに有りませんでしたか？」  
「えつ……と、一寸待<sup>ちまうと</sup>つてて」

彼はピアノの周りを見渡した。

「もしかしてこれかな？」

彼の手に握られていたのは僕のリコーダー。

「はいっ其れです。有難う御座います」

そう云つて帰らない僕を、彼は不思議そうに見ている。  
帰りたくなつたのだ。さっきのピアノの音が名残惜しくて……。

「あのっ！今弾いていた曲、何て云う曲名なんですか？」

彼は一瞬驚いた顔をしていたがその後、直<sup>すぐ</sup>に微笑んだ。

「此の曲はギロツクの『雨の日の噴水』綺麗な曲だろう」

彼はまた、ピアノを弾き始めた。

最初は小雨でポツポツ降っている感じがした。段々聴いていると

緩やかな流れが速くなっていく。

何でだろう……。

其の流れが僕の中にまで流れて行く。伝わってくる。

ザアーとした感じが嫌いだったのに、其の音は不快なものでは無い。何とも不思議な感じだ。

「君、音楽は好きかい？」

突然の彼からの質問。

僕は首を横に振った。

「じゃあ君は、音楽が嫌いかい？」

其の質問にも僕は首を振った。

嫌いなはずなのに、嫌いだったはずなのに……。何時の間に僕は音楽を嫌なものだと感じなくなった。雨もそうだ、不快に感じなくなった。

彼はうつすら笑った。其の笑みはとても嬉しそうだ。

「弾いてみる？ピアノ」

僕は慌てて断る。

「無理……無理です！！僕、音楽苦手だし下手だし……其れにみんな唾うから。絶対に」

怖かったのだ。音楽が、雨が。だって音楽は僕を唾い物にするから。

僕が歌を歌えば皆、嘲笑う。僕がリコーダーを吹けば皆、僕の方

に唾を吐く。

何がいけないんだろうつて考えてみた。

でも、何も頭に浮かばなくて……僕はただただ一人で泣くことしか出来なかった。そんな時にはかり雨は降っていて、僕を余計に空しくさせる。

「嘘わないよ。そんな風に君を」

何時の間に、彼はピアノを弾いていた手を止め、僕の前に立っていた。

彼の目にはとても強い意志の様なものが秘められていた。

「音楽は怖くない。大丈夫」

彼の勢いに押されて、うん……と自信なさげに僕は頷いた。

「一寸来て」と連れて来られたのはピアノの前。

「ここ押してみて」

僕は躊躇いながらもゆっくり人差指で、鍵盤を押してみる。

ポーーーーーン

音が出た。たった一つの音だけなのに、何故か涙が落ちてきそう

だ。  
僕にもこんなに綺麗な音が出せるのかと。僕にもこんなに心に響く音が出せるのかと。

「いい音だろ？」

「はい……」

彼は僕に諭す様に、静かに語り始めた。

「ピアノは誰にでも出来る訳では無い。楽器って云うモノは人の感情を表す道具……って云いかたは僕は好きじゃないけど、人の感情を表す『鏡』だから。きつと今の君の気持ちが其処そこに表れたんだよ。君の『音』がね」

彼は最後の言葉を強調して云った。

僕の音……？

そう訊くと、彼は大きく頷く。

「そう。君の『音』。その音は僕には出せないし、君以外誰一人出せる者は居ない」

僕の音。僕自身の音。それは誰にも出せないし、僕だけの音だ。

他人の評価を気にするなどは言わないが、他人の評価ばかりを気にしているのはいけない。僕が納得する、自分の音が出せれば其れで良いと思う。

僕が、僕自身の音を信じていなければ、決して良いと音は出ない。僕自身が僕を信じていなければ、僕を否定していることと同じだと今、気付かされた。

僕の嫌いだった音楽に。僕の嫌いだった雨に。

「たとえ誰かが君の音を嗤ったとしても、きつと今降っている雨が嫌な事全部流してくれるよ」

「そうですね」

僕は窓の外を見ながらそっと微笑んだ。

また音楽室に来よう。雨が降っている時の、この音楽室に。きつ

と嫌な事を、「音楽」が「雨」が全部流してくれるから……。

そして……彼のピアノを聴く為に。彼に会いに行く為に……。  
僕は「雨の日の音楽室」に来るのだろう。

罪。それは僕の名前（前書き）

・ボーイズラブ

・残酷な表現

苦手な方はご注意ください。

あらすじ

自分の犯した罪を死で償おうと、高層ビルから飛び降りたりク。そこで待ち受けていたのは？

罪。それは僕の名前

「ごめんなさい、お母さん。

ごめんなさい、お父さん。

そしてごめんなさい、兄さん。

僕は旅立ちます。

空よりも高い場所に。

誰も知らない場所に。

心が綺麗になれる場所に。

僕が僕らしく居る場所に。

その手紙を残して僕は、高層ビルの最上階から飛び降りたのだった。

「うっ……ん」

僕はゆっくりと目を開ける。

「ここは何処？」

それが一番の感想。

周りを見渡しても、黒一色。

なんか闇の世界に来たみたいだ。

ふわふわとして体が浮いているようで………ってええっ!?!? 浮いてる!?! 浮いてる!?!?

自分の足が地についてないことに気づき、リクは慌てた。

本当に僕は死んだの?!

不思議な気持ちなので、何と云っていいのかわからない。

「ここはどこか知ってるかい?」

突然、誰かの声が頭上から聞こえた。小さな男の子のような透き通ったソプラノ。

上を向いてみるが、真っ暗だから何も見えない。

「見るんじゃなくて、聞いて。もう一回言っよ。ここをどこか知ってるかい?」

「死の世界」

正直にそう答えた。誰かは溜め息をついたらしく、はぁ………と情けない空気の音がした。

「ここに来たものは様々な答えを言う。よく言えば天国。悪く言えば地獄。だがみんな意味は同じだ。ここが死の世界だと言う」

楽しそうに話しているのを聞いて、リクは不愉快になった。

どうしてこんなところで楽しそうに話ができるんだ。僕は死んだんだ。自由にさせてくれっ!

そう言いたいと言葉に出ない。なぜだろうか?

「君はボクの姿が見えるかい?」

「見えない」

「………そうかい。じゃあ少し話をしようか?」

「は?」

あまりに突然のことで頭が追いつかない。

「僕はここの住人、門番と言ってもいいかな? 名前はミナト。君は?」

「…リク」

「リク、君はボクをどんな奴だと見る？」

「どんな奴と言われても見えないからわからない」

真つ黒でどんな奴かもわからないから、そんなことを聞かれても答えることはできない。

ミナトは僕のことが見えているのだろうか？

「君は見かけによらず、何と言うか物事をはつきり言っただね」

「ミナトは僕のことが見えてるんだね」

「洞察力もいいのか。意外だな」

さつきからミナトは僕に失礼なことばかり言ってるような気がするんだけど、気のせいだろうか？

「それはいいとして、本題に入るうか。君はなぜここに来たんだ？  
平然と訊いてくる。」

「……………」

僕は答えることが出来なくて黙ってしまふ。とても答えにくいことだ。

言えるわけがない。

僕はいけないことをしてしまった。禁断のものに手を出してしまった。そして大切なものを壊そうとした。だから僕は死んだんだ。

それをわざわざ他人に言うことはしない。そう、あっちの世界で決めてきたのだ。

「……………まあ、いいだろう。言いたくないのならそれでもいい。突然で悪いけど試験を受けてもらおうよ」

「はい？」

「試験。ここはまだ中間地点。正式にはまだ死の世界ではないんだ。今から試験を始める。合格すれば、君の願いを一つかなえてあげるよ。大抵は受かる簡単な試験だからリラックス、リラックス！！」

「ええ？ちよ……………つちよつとお！？」

突然目の前が明るくなって……………ブラックホールならぬホワイトホールに吸い込まれていく感じがした。

「う……ん」

目覚めると、僕は大きなホールの真ん中に置いてあるソファーに寝ていた。

ここは何処？というか、なんでこんな真ん中に寝てるんだろう？

「まあ、いつか」

僕はソファーから起き、周りを見物してみた。

ソファー以外何にもない。殺風景な部屋だ。まるでモノクロの世界みたいで僕は嫌いじゃない。

で、これからどうするかな……。

とりあえず部屋に一つだけあったドアを開く。

開けて吃驚！！ビックリ箱！（何か古い？

僕がいた部屋と真逆で光満ち溢れて眩しい。鏡やら、ガラスやら。

「本当にここ何処だよ……」

僕はとにかくここにいてもしょうがないと思ったので、この建物を見て回ろうと思う。誰かに会えばここがどこか教えてもらえるだろうし……。

僕は、ちよつと探検気分であたりを歩きまわった。

選択肢は二つ。右と左だ。

う……んどうしようっかな？と唸って考えた結果。

じゃあ右。右にしよう！！

僕は右に曲がり歩いて行った。なぜ右にしたかというのと、いつも僕は野球をするとライトにいたから。

ライトを日本語に直すと右っていうことで。なんとも簡単な理由だ。

右に曲がってしばらく歩いていると、誰かの影が見えた。

小さな男の子。中学生ぐらいだろうか？

「やっほー」

彼は僕に手を振った。

さっき、聞いた声だ。

「ミナト？」

疑問形で訊いてみると、ミナトらしい人物はケラケラと笑いだした。なんか馬鹿にされたようで気に食わない。

僕は睨めつけた。

「怒らないでよ？何回も間抜けな声を出すからさあ……ふっ」

失礼な奴。フォローにもなっていないって言うか……絶対僕のこと馬鹿にしてるよね？

さつきもそうだが、ミナトはどうやら僕に変に突っかかる。怒らせたいのか知らないが、そんな言い方されれば誰でも嫌な気分になると思う。

「で、ミナト。ここは何処？」

「うーん」

もったえぶるように、ミナトは腕組みをする。

ああ〜ムカつくなあっ。

僕の沸点を到達しそうだ。そして次の一言は僕を激怒させることになる。

「ヒ・ミ・ツ」

コイツは絶対俺を馬鹿にしている。間違いなく100%!!

「いいから早く目的を言ってくれませんか？ここは何処で僕は何をすればいい？試験って何？筆記試験？」

切れた僕は冷たい視線をミナトに向ける。だが、それがなんともないかのようにあっさりと無視する。

「そんな一変言われても分かんないよ？まあっ、とりあえず、鬼ご

っこじょうっ！」

「はい？」

意味不明なことを言われて僕は目を瞬かせた。

「今回の試験はボクと鬼ごっこ。リクがボクを捕まえることができたら、リクの望むところに連れて行ってあげる」

スタート！！

いつの間にか始まった。鬼ごっこ。

何かよく分からないけど、無償に勝ちたくなってきた。あんな奴に負けたくない。

僕はいつの間にかミナトが行った方向に走り始めていた。

「っこ広すぎ……」

鬼ごっこが始まって何分……いや、何時間たっただろうか？一向にミナトが見つからない。

ミナトだけじゃない。人の気配すら感じない。

なんとも気持ち悪い感じだ。音も何もしない。まるで僕はここに閉じ込められたみたいだ。

……まるでじゃなくて、本当にここに閉じ込められていたとしたら？

ふとそんなことが頭をよぎる。

まさかそんなことはないよな。

頭を横に振り、嫌なことを追い出そうとする。

「ミナト」

彼の名前を呼んでみたが、返事をするわけもなく、ただ空しく僕の声が響いていた。

誰もいない僕だけの世界みたいだ。

「どうしてこんなことになったんだろう」

大きな溜息をつく。

真つ暗なこの世界。ここは地獄ではないようだ。

僕は死んだはずだった。死んで罪を償おうとしたのに、どうして僕は中途半端なところにいるんだろう。

ミナトは一体何がしたいんだろう？

疑問は沢山ある。

でも、とにかくミナトを探さないと、何も始まらない。仕方なく、歩き続ける。

「ミナーター」

「……………」

なんでいないんだよ、この野郎っ。

なぜか分からないけど、泣きたくなってきた。一人が寂しくて…

…

そこで、あること思い出す。

そういえば、よく僕、小さい頃は泣いたなあ……。ちよつとしたことで泣いて、いつも兄さんに慰められたっけ。

兄さんに頭をなでられるのが好きだった。

優しい笑みを見せられるのが好きだった。

今、兄さんは幸せだろうか。

父さんも母さんも元気にしているだろうか。

家族のことを考えたら涙が落ちそうになった。

「何、泣きそうな顔をしてんの？子猫ちゃん」

軽快な声が後ろから聞こえた。

ミナトじゃない。それは分かった。もう少し、大きな男の人の声。

恐る恐る振り向くと、ニコニコとした青年がいた。

「子猫ちゃん迷子お？」

「子猫ちゃん？」

周りを見渡すが、猫なんてどこにもいなくって、僕の行動見た青年は、大きな声で笑い出した。

「君のことだよ」

「僕…？」

聞き間違いかと訊き直すが、青年はうんうん肯定する。

「このへんじゃ見ない子だね。新人？」

「しんじん？」

よく分からない言葉に首をかしげる。

「じゃあ、もしかして今テスト中だとか？」

「あ…はい」

「…ふん。こんな子猫ちゃんがね……。今の世の中はどうなってるんだらうね」

意味深な発言に怪訝な視線を向ける。だが、この周りは少し暗いので青年は僕の怪訝な視線に気付いていないみたいだ。

「あの、その子猫ちゃんて言い方はちよつと……」

控え目に言つと、青年はなぜか突然抱きしめてきた。

混乱した僕は、青年を引き剥がそうとするが、全然離れない。でも、青年は凄い力で僕を抱きしめてるわけでもない。

息苦しいと感じない。でもなんでだらうか？

なんか寒い。

人間の温かさを感じない。はっきりと言つと青年の体は冷たかった。

「あのお……」

「えっ！あつ、ごめんごめん！…ついね、つい…」

青年は優しく離れてくれた。

「いえ、大丈夫ですけど。あのそのお……」

言ってしまうていいのだらうか？

なんか失礼な気がして、言葉にするができなくて、結局は口を閉じてしまった。

それを気にしていないのか青年は、話を進める。

「えっと、俺はニシオ。君は、なんていうの？」

「リクです」

「おおリクか。いい名前だな」

「あつ有難うございます」

満面の笑みでそう言われて、ついドキッとしてしまう。

今の笑顔　一瞬、あの人の顔が浮かんだが、すぐに消し去った。

ダメだ。忘れるんだ。

自分の頭に呪文を書けるように何度も何度も心に誓う。

だって僕は……。

「逃げてきたんだ？」

さっきの明るい声が一転、突然ニシオの声が冷たくなった。

ニシオの目を見ると、凍った瞳の色をしている。

でも、それ以上に驚いたことがある。

なんでニシオは僕の思っていた言葉を言ったんだ。

これは偶然なのだろうか？自分の心で問いかけると、ニシオは

『偶然じゃないよ。俺はリクの心が読めるからね』

僕の心に答えてきた

何これ？テレパシー？

「リクは自分がどうしてここにいるか知ってるか？」

「どうしてって……」

どうしてだろうか？なんで僕はここにいるんだろうか？

「分からない」

分からないと言った僕をニシオは鼻で笑う。ムカついたけど、ど

うにも怒れなかった。

ニシオに分かっていたんだ。どうして僕が分からないと答えたことを……。

「君はね。迷っているんだよ」

「何に？」

それでも、僕は、平然と聞こうと装うから、ニシオは言葉を吐き捨てた。

「リク自身は分かっているんだろう。人に聞いて教えてもらうなんて甘ったれるなっ。自分で考えろっ」

僕は自分で考えることが苦手なんだ。だからすぐに誰かに頼ってしまう。

何とも甘ったるい人間。

だから僕をこんな結果にしたんだ。死を選択したんだ。もし、自分が考えれる人間だったらこんなことはしなかっただろうね。

自分を嘲笑う。

でも結局は自分がいけない。いけないものに手を出してしまったのだから、けして目覚めてはいけない感情。それは僕は知ってしまった。

伝えてしまえば楽なものなのに、言えないこの気持ち。一生伝えられない苦しさを考えたら死んだほうがマシだなんて考えていたんだ。

「リク。今はどんな気持ち？このままミナトが見つけれなくて、一生ここに中途半端に過ごすか、それともミナトを見つけて合格し、君の望む世界に帰るか」

分からないとは言えない。

だって、この目の前にいる男は知っているんだ。

僕の気持ちを見透かしている。

「死ぬことははっきり言ってもできる。死にたいと思えば簡単にな。でもな、生きるってことは簡単にはできないんだよ。一人ひとりの生命が誕生するには年月が必要だ。母さんや父さん、家族

の人たちの愛情がないと生きていけないんだよ」

知ってる、分かっている。家族がいないと生きていけないって分かっている。

みんな大好きだし、母さんも父さんも、友達も　そして兄さんも。

でもね、僕は間違っただ。僕はそれを壊しそうになる存在なんだ。だから、だから、僕は……。

『死のうとしたの？』

ニシオは口を開けずにニコニコしている。だけど僕の中に入ってくる言葉は残酷で……、正しくて、怒りが込み上げてくる。

「だって僕は好きになっただけじゃない人好きになっただ。大好きで大好きで、ずっと隣にいたいと思うけど、好きな人を、傷つけてしまいそうで……」

本音がぼろぼろと口から出てくる。

言っちゃいけないんだけど、言葉が僕の中から溢れてくる。

「好きだった。今でも好きっ！で、でも……隣にいることは許されない。そんなぁ…苦痛に、耐えられなくてえ……っ、どうした、ら……いいの、分からなくて……っ」

ついでとばかりに涙も溢れてくる。

僕のことをニシオは優しい眼差しで眺めてくる。

さっきまで怒っていたニシオなのに、どうして優しい目をしていてるの？

それはニシオしか分からないけど。きっと僕のことを見守ってくれているのだろうと思いたい。

「リク。今だよ。今言っちゃえば、君の未来が変わる」

「えっ？ミナト？」

どこからかミナトの声が聞こえる。

「ボクはまだリクの前には姿を現さないよ。君は気付かなきゃいけない。違う、もうリクは気付いている」

ミナトも僕の心読むのか？

そう問いかけると、ミナトが笑った気がする。何となくだけど気配で分かった。

僕はゆっくりと口開く、でも勢いは嵐のように激しく。

「好きなんだっ。僕は…僕は…！！兄さんが好きだ…っ！！」

これがただの兄弟愛だったらどんなに良かったか…、今考えてももう遅い。

僕は、一人の人として、恋として、兄さんが好きだ。

でもそんなことは誰にも言えなかった。男同士でしかも兄弟で…

…。

この気持ちに気付いた時から混乱しっぱなしで、落ち着く暇がなかった。

「それが今のリクの気持ち？」

いつの間にかミナトは僕の隣にいて、優しく笑っていた。

僕はそれに強く頷く。僕の想いは否定しない。

逃げてばかりじゃ何も解決しない。

だって、僕は気付いてしまったんだ。それを気付かないふりをするなんて、僕はずるい。

決して消えない僕の想い、兄さんへの恋心。

もう目を逸らさない。

「リク。君はこの試験合格だ。ボクを見つけたからね」

「でも、それはミナトが…」

「いいから聞いて、リクはね、試験に合格した。ねえ君はどうしたい？一生ここにいるか。死の世界に行くか、それとも　もとい世界に戻るか」

ミナトの言葉にぎよっとした。

「どっぴいっこと?」

「ちよつと前にも言ったよね。君は死んでいないって。君が望むなら帰ることができる」

ミナトの手がいきなり光りだした。

何だどじつと見てみると、ミナトは僕の前に円を書きだした。

その円の中には病室が見えた。そして、そこには兄さんと僕?

「まだ君は死んでいない。今は植物状態だ」

円の中には眠っている僕がいる。頭に包帯が巻いてあつて。

兄さんは僕の手を握りこんでいる。

「あつちでは、君が自殺してからちよつと一週間。彼はずっと付きつきりで、君を見ていたんだよ。優しい人だ」

兄さん……。

ずっと兄さんを見ていると、突然兄さんがぼつぼつと眠っている僕に話しかける。

「リク。起きて、ねえ……リク」

優しい兄さんの声。大好きな兄さんの声。

「俺はここにいるよ。なあ戻ってこいよ、リク……っっ!!」  
兄さんの眼には涙を浮かべていた。

こんな兄さん見たことない。

泣け叫ぶ兄さん、見たこと……ない……。

いつも優しく笑っていて、時に悪いことをしたら怒ってくる兄さん。

勉強を教えてくれて、できたら褒めてくれる兄さん。

小さいころから好きだった。

『にいさんを泣かせたら、ぼくがゆるさないっ』

小さいころよく言っていた台詞。

今、兄さんをこの状態にしているのは誰？兄さんを泣かせているのは誰？

僕だ。

僕は兄さんの隣にいたい。

泣かせたくない。

僕が守ってあげたい。

今もの昔もこの気持ちは変わっていない。

だから、僕は

「帰ります。お願いします。僕を兄さんの元へ連れて行ってください」

ミナトとニシオの前で僕は土下座した。

僕は、兄さんを愛してしまった。

それが僕の罪。

兄さんを愛したことが僕の罪だと、ずっと思ってきた。

でもそれは違う。

本当の僕の罪は、自分から命を絶ったことだ。

兄さんを開いたことへの罪悪感がこと葬り去ろうとしたことが僕の罪だ。

だから、僕は償います。

兄さんを幸せにする。

そして、僕が死に選択するとき、兄さんがいなくなったときだけだ。

誓います。

そう、心で誓った瞬間、僕の目の前が突然真っ白になった。

「ええ？ミナト？ニシオ？」

きよるきよる周りを見渡しても二人の姿が見えない。

「大丈夫。ボク達はどこにいる。君が元に世界へ行く準備ができたよ。大丈夫。兄さんとうまくやんなよっ」

「俺達は人間じゃないから、リクと一緒にいけないけど、ここで見守ってる」

「もう迷わない。だから」

一生ここに來ること……ない。

「悲しい別れじゃないよ。一生会えなくても、ずっとつながっているから。ボク達のことを忘れないでね」

「うん」

二人が今、僕の顔が見えているのか分からない。

だけど、僕は満面の笑みを見せた。

気持ちを分かってもらいたくて、有難うって……。

「バイバイ。リク」

「うん。バイバイ、ニシオ。ミナト」

ここに來た時の暗さが何もなかったかのような爽やかさ。

涙はいつの間にか、止まっていた。

リクがあっちに戻った後、ミナトとニシオは寂しそうに話をしていた。

「なあ……ミナト。リクは俺達のことを覚えていると思うか？」

実はリクに言っていなかったが、この世界から出た瞬間、今までのこのいた記憶は消されてしまうのだ。

今までここに来たのは何億兆人。

だけど元の世界に戻るのには、ほんの一握り。

自分が自分を認められず、自分を傷つけるものは沢山いた。

ここは最後の関門。

死の入り口。死をとめる場所ではないのだ。

自殺をして、なお死を望むものがこの先に行ける。それが地獄なのか、天国なのかは人それぞれ違う。

ミナトとニシオ達はそれを見極める番人。番人を選ばれるものは、人を殺した罪を死で償った者達だ。

ニシオは、家族を。ミナトは、恋人を。自分の手に委ねてしまった。

その罪の重さに耐えきれなかった者がここの番人として仕える。その数知れず。

「う……ん、どうだろう……。でも、覚えていると信じたい」

ミナトとニシオは遠くに祈った。

兄さんあのね。僕、ずっと兄さんのことが好きだったんだ。今まで言えなかった。

ごめんね。

僕は兄さんを一人にしないよ。僕がずっとそばにいてあげる。  
罪はいけない。けどね、  
罪があるからこそ、僕は兄さんの元に戻ってこれたんだ。

だから、お願い。

僕をこの罪に縛り付けて……。

罪があるからこそ、僕は兄さんの元に戻ってこれたんだ。

僕はずっと罪を償い続ける

そして、兄さんを愛し続けるよ……

## 季節たちの恋

「私、貴方が好きよ。貴方は私のこと好き？」

「嫌いじゃないよ」

そっけない答えに幼馴染は、涙を浮かべる。

「嫌いなら嫌いって言うてくれればよかったのに」

幼馴染の春は、曖昧の態度の僕に拗ねた。

「嫌いじゃないよ。だけど僕は、春と一緒にいることはできないんだ」

僕も春のことは好きだ。

ただどのこの想いは言ってはならないのだ。それを春も分かっているはずだ。

「私のこと好き？」

寂しそうに言う君は可愛い。

好きだよ。………今だけはね。

そう思っている自分は残酷だし、でもそれは春も一緒だった。

「好き……とは言えないよ」

「うん、わかってるよ。わかってる」

涙を流しながら、笑っている春。それをただ見ていることしかできない僕。

春も僕も分かっている。会えるのは今だけ。

時が過ぎればきっと想いは変わってしまうのだから。僕も………春も。それは自分たちにはどうしようもできない。

今は好きだとしても、あと3ヵ月過ぎれば、僕の想いは春から離れてしまうのだ。僕の意味関係なく。

「何度季節が廻ったのだろう」

「分からないわ」

「それはそうだよ」

僕たちは知る由もなかった。どうやって季節が廻るなんて、想像ができない領域だから……想像すらしたくなかった。

僕たちは一年に一回死んで、そして時期になると生き返る。綺麗な姿、人それぞれの個性を持って生き返る。春も僕も、その繰り返しだ。

春と僕が会えるのは季節の変わり目。春が死ぬ直前、僕がこの世に生まれてほんの少しの間。

二人は恋をする。毎年、同じ時期に。

後3カ月経てば、僕は違う人に恋をする。次の季節の変わり目。僕が死ぬときに。それは絶対に変えられない、僕たちの使命。

「また今度告白するから、また聞いてね」

春は優しく微笑んでいる。

何度この会話を繰り返し返しただろうか。来る年くる年、僕たちは苦しい思いをする。

好きだっという気持ちを告げられない苦しさ。あと少しで触れられる距離にいるのに、触れてはいけない辛さ。

恋に落ちているのに結ばれない、一生続く赤い糸。

「ああ……また来年会おう」

「うん……またね、夏」

春は寂しそうな笑顔を浮かべて消えていった。

ミンミン

蝉の鳴き声が聞こえてくる。

もうすぐその日、夏は来ていた。

## 夏休みの密室（前書き）

ボーイズラブです。

苦手な方はご注意ください。

## 夏休みの密室

「もうかよー。夏休みってみじけえーな」

幼馴染の家で勉強をやってる最中。

宿題を前に和正は愚痴る。

シャーペンを持ち、宿題に立ち向かうが全然分からず、ついつい宿題に向かって奴当たってしまうのだ。

まあっ、なんと言おうと宿題が無くなるはずもなく……。

手をとめて1分が立ったころ、目の前にいる幼馴染の弘樹がバシバシつと鉛筆で宿題を叩く。

「そんなこと言ってないでやれよ。俺がわざわざ教えてやってるんだろっ」

イライラしているのか幼馴染の表情は険しい。

「言うぐらいいいだろっ、何か減るもんじゃないし……」

「減るだろ？」

「なにがだよっ」

減るもんなんてないって反論すると、今度は和正の頭を鉛筆で叩く。

「やる気だよ。喋ってないで勉強しろっ」

怒られた和正は宿題を渋々始める。

確かに弘樹に言われたことは正論だし、分かっているんだけど……。

和正はいまいち納得していなかった。

(おれたち、恋人だよなあ……?)

実は和正と弘樹は恋人同士なのだ。

だけど、和正は疑問に思っていることがあった。それは弘樹の気持ちのことで、だ。

言葉にしないで分かるぐらい一緒にいる仲だ。だけど、この頃表情にすら出ないから、弘樹の心情が読めないでいた。

不安。

その言葉が和正の中に蹲すくまっていてなかなか逃げ出せそうにない。

「おいつばーっとするなよ。勉強早く終わらせよう」

勉強、か……。

このお、勉強バカっつ

弘樹が勉強熱心なのは知っている。

大学に行きたいから頑張っているのも和正もよく分かっているのだ。

だけど、やっぱり寂しい。

かまってもらえる方法が勉強しかない。二人で一緒にいる方法はこれしかない。だから無理矢理勉強を教えてほしいと頼むのだ。

本当は二人で他愛もない話をして笑ったり、遊んだりしたいのにな……。

我が儘な願いだ。

そんなこと言ったら、きっと弘樹は何言ってるんだって嫌な顔をするに決まっている。

諦めに似た溜息が和正から出た。

「……どうかしたのか？」

「別に」

様子が変だと思ったのか弘樹は心配そうな声で問いかけてくるが、和正はそっけなく答えた。

「別について……なんか怒ってるのか？」

目の前にいる不器用な恋人は困惑した表情で和正を見据えている。

「なあ〜遊びにいかねえ？」

本音を言ってみることにした。

わざと茶化していったのは自分のためだ。

もし、真剣な目で言っただけ嫌だなんて言われたら……と思うと怖かった。

「遊びについてまだ勉強終わってないだろ？」

「そうけど……気分転換にさ？」

「駄目だ。お前そんなこと言って逃げるつもりか？」  
その一言が酷く和正の心に突き刺さった。

(おれ……そんなにも信用されてないんだ……)

逃げるだなんて言われて傷つかない人のほうが少ないと思う。弘樹は昔からそうで、無遠慮に痛いところを突くのだ。本人はそれに気付かないからたちが悪い。

「逃げるなんて……んなことしねえーよっ」

「じゃあなんでそんなこと言っただ？」

この鈍感はまだ分らないのかっ。

諦めていたはずなのに、今度は怒りのほうが和正の中で大きくなっていく。

「もう知らないっ勝手に勉強頑張ってください、優・等・生く・ん」  
和正はわざわざ弘樹の一番嫌う言葉を強調した。

宿題を弘樹に放り投げて和正はこの部屋から出ようとする。だが、弘樹はそれを許してくれはしなかった。

「お前は、何を拗ねてるんだ？」

「はあ!？」

弘樹からの言葉に耳を疑う。

(拗ねている？おれが？拗ねてるんじゃないっ！おれは怒っているんだ)

そう目で訴えてみても、弘樹は何一つ分かるうとしてくれない。

すっかり涙を流しそうで和正は弘樹に背を向ける。和正は涙腺が弱くすぐに泣きやすいタイプだ。弘樹もそれを知っている、だから意地を張って口を強く喰いしぼる。

「俺はお前のために言ってるんだぞ？勉強が早く終われば、遊べるだろ？」

正論だから言い返すことができなくて黙ってしまっ。

でもでもっと、はやる気持ちを持って余している和正に、弘樹は優しい声音で問いかける。

「勉強終わらなきゃ、気が休まらないだろ？」

「……うん」

弘樹は和正の腕をとり自分のほうへ振り向かせて、和正の目を覗きこんだ。

「和正と少しでも二人で長く一緒にいたい、って俺は思ってるからそれは和正もだろ？」

「うん」

「だから、早く勉強を終わらせような」

「うん……」

これではまるで、親が教え諭されている子供ではないか。

和正自身は気付いていなかったのだが、勉強に弘樹をとられたように面白くないと思っていたのだ。

それは弘樹は知っていた。だから、怒らなかつたんだ。

嫌味っぽく弘樹に言葉をぶつけても……。

じわじわと熱くなってくる気がする。なんか全部弘樹に心の中を見透かされていたと思うと恥ずかしくなってきた。

「早く終わったら遊びに行く以外にご褒美やるから頑張れ」

「ご褒美って何？」

甘えたように訊いてみると、

「……後で考えとく」

「ん？」

変な間が和正に疑問を浮かばせていたが、弘樹は上機嫌に笑っているだけだ。

「この後のお楽しみだ」

「お楽しみって？」

「言ったら、お楽しみじゃ無くなるだろ？」

「うん……」

「じゃあこれは序章ということだ」

「うん？」

優しく和正の頬を包んで顔を近づけ唇が触れた。

一瞬秀囲気にもまれて和正は目を閉じようとするが、無理矢理弘

樹の顔を引きはがした。

「やめるよお…っっほら勉強だ！！べんきよっ！っ！」

「さっきまで勉強嫌がってたの誰だよ」

「それとこれとは、違うんだよっっ」

「はいはい」

弘樹は諦め気味に笑った。

……学校でも、いつも一緒にいられる時間は長い。  
でも、静かに過ごす時間はほとんどない。

夏休みの密室。

クーラーの効いた、だけど

とても温かな二人だけの空間。

## 夏休みの密室（後書き）

こんばんは、彩瀬姫です。

夏休みもそろそろ終わりだなあ……っと思いつながら、書いていました。

また少しずつ短編を更新できるよう、頑張りたいと思います！！

雨の日の音楽室〜SWITCH〜(前書き)

ボーイズラブです。

苦手な方はご注意ください。

## 雨の日の音楽室〜Switch〜

「し、失礼します……」

そつと僕は古い扉ドアを開けると、微笑んでいる彼がグランドピアノの椅子に座っていた。

「そんな所に隠れてないで、おいで」

彼はそう云いながら、僕に彼の後ろに有るイスを勧めた。

「はい」

僕は、椅子に腰をかける。

ぎこちなく座っている僕に彼は、くすつと笑って見せた。

「そんなに緊張しないでよ。毎日来てるんだからさあ……ね？」

僕の緊張を解くように、彼は僕の頭を撫でる。

だが、其の仕草は僕にとって落ちつかせてくれないものだった。

……ドクドクドク。

心拍数が速くなっているのは気のせいだろうか？

「はい、すみません」

緊張しながらも僕はしゅんと下を向くと、彼はさっきよりも優しく僕の頭に手をのせてきた。

ドク ……

若しかしてこれは病気なのだろうか？

そんな心配が頭によぎるが、彼の言葉で心配は何処かへと消えてしまう。

「木下君はいい子だね」

「そっそんなことないですっ」

今の言葉褒められているのかよく分からない。

だけど、僕はとても嬉しくて、そして唯恥ずかしくて……顔を見られなくて顔の前で手を大きく振った。

僕は毎日この音楽室に来ていた。

彼の日、彼の出来事があってから……。

\* \* \*

偶然僕がリコーダーを忘れたので、音楽室へ行ったときだった。

階段を上っている途中、雨が降っていたけど、音楽室に行くにつれてピアノのくぐもった音が聞こえて……それが<sup>とく</sup>逆も楽しそうな音に聞こえたんだ。

其の楽しそうな音を奏でていたのが彼だったのだ。

「彼のお……また此処に来てもいいですか？」

彼は驚いたように、目を見開く。気まずいと彼は僕から目を逸らした。

いけなかったのだろうか？

僕は目線を床に向け、黙っていた。

聞くのが怖かったのだ。断られるのが恐ろしかった。だが、

「……いいよ。又来てよ。この雨の日の音楽室に」

彼は雨の降っている外を見ながら僕に言った。本当に良いのか彼と目が合わないのです、分からないけど、断られなかったと安心する。

「ありがとうございます」

失礼しますと、一礼して音楽室から出ようとした時だ。

「？」

突然後ろから抱き締められた。

ええ？何が起こっているんだ？と、後ろを振り向くと、彼は複雑の笑みを僕に向けていた。

「また、絶対来るんだよ」

彼は少し抱きしめていた力を緩めた。僕は体ごと彼に向き合う。

「約束」

そう言って彼は、僕に小指を差し出してきた。

戸惑いながらも、「はいっ」と頷く。

ゆっくりと彼の小指と僕の小指を絡める。

彼が僕を待っていると思うと嬉しくて、ドキドキしてきた。

其の気持ちが無なのか未だよく分からないけど、きっと何時か分かる時が来ると

僕は微笑んだ。

\* \* \*

「木下君、今日は何の曲が聴きたい？」

彼は、分厚い楽譜をペラペラと捲りながら、僕に何れがいいかと訊いてくる。

「えっえっと……」

僕が迷っていると彼は、楽譜を僕の持たせて、彼は何も見ないで曲を弾き始めた。静かなゆったりとした主旋律メロディーが流れていて聞き惚れてしまうこの曲。

彼が弾いている曲は、「パツヘルベルのカノン」。僕の大好きな曲だ。

初めて彼が此の曲を弾いてくれた時には、思わず涙が出てしまうほど感動した。彼と出会った時の「雨の日の噴水」もそうだけど、流れていく様な自然な曲が僕は好むらしい。

聴いていると、突然僕の肩に手が触れてピクツと驚いて、体が跳ねた。何時の間にか彼の手は止まっており、勿論曲も流れていなくなつた。

「木下君はこの曲が本当に好きなんだね」

「はい。春陽先輩はるめいが弾いている曲はどれも好きです」

「そう？有難う」

彼 横内春陽先輩よこうちゅんめいは、一寸恥ずかしそうに笑つた。

実は春陽先輩は照れ屋なのだと最近知つた。笑つた顔がうつすら赤く染まるのだ。

ほぼ毎日一緒に居るのだから知らない顔を知るのだろうけど、其

れが嬉しくも悲しくもあつた。

僕だけが知ってる、僕だけが知らなかった。

二つの想いが交差する。

「先輩は、なんでピアノを始めたんですか？」

だから僕は問いかける。

先輩を知りたいんだ。

先輩の事を僕だけが知っていると、いう優越感を得たいわけではない。

そういう意味じゃなくて、言葉に出来ない様なこの感情をただ知りたかった。

「うん？なんでつてまあ成り行きかな？母親がピアノの先生なんだ」

「そつそうなんですか……」

「うん、母が弾いてたのを小さい頃から聴いてるからかなあ……僕も弾きたくなっちゃつて」

ピアノに触れた時の優しいひんやり感がとても気に入って……と春陽先輩は楽しそうに昔話をする。

ピアノ発表会で緊張して暗譜していた曲が頭の中からスポン抜けてしまったとか、試験では音が気に入らなくて自分で調律したとか。

楽しく楽しくて、僕は春陽先輩の話聞くばかり。其れに焦れたのか春陽先輩は僕のことを何でも質問してくるようになった。

「木下君、そう言えば下の名前なんて云うの？」

「えっ？ああ……菜緒です。女つばい名前で僕は嫌いなんですけどね」

自嘲気味に云うと、春陽先輩はそんなことないとはかりに大きく首に横に振る。

「菜緒って好い名前だと思っけど、僕、好きだよ？」

「ええ？……あっはい、有難うございます」

変な意味に捉えそうになって僕は自分を窘める。

好きだよ？

其の言葉がまるで……恋人の様な、告白された様な気がしたから

……

「じゃあ？菜緒君は僕のこと好き？」

「ええ……はい、好きです」

「そう。じゃあいいよね？」

「えっ？」

そつと近づいてきた春陽先輩の顔が、唇が……僕の唇に触れた。

「せつ先輩！？」

驚いた僕は先輩を押しつけた。だが先輩は平然といた顔で僕を見ていた。

「僕が好きって意味はこういう意味……菜緒君は僕のこと好き？」

あまりに真剣な瞳に僕は暫く口を閉じる事も言葉を発する事も出来なかった。

其れと同時に僕の心の中の”何か”が動き出した。

此れは、外は薄暗い雲が見え、ポツリポツリ雨が降り始めた

頃の出来事だった。

## 雨の日の音楽室「Switch」(後書き)

お久しぶりです。彩瀬姫です。

検定やテストで忙しくて全く更新してませんでした。

今回は雨の日の音楽室の続編です。

一応前の話を見なくても分かるように書いたつもりですがどうでしょうか？

久しぶりに書いたので前に書いた漢字が、今回は漢字に変換されていない箇所があるかもしれせん。

有りましたら、指摘してくださいと嬉しいです。

サブタイトル「Switch」は僕である菜緒のスイッチを入れたということでした。

”何かのスイッチ”については多分分かってる人が多いと思います  
が…。

いつになるか分かりませんが、また雨の日の音楽室書けるといいな  
と思っています。

読んでくださって、有難うございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5234h/>

---

遠想

2010年10月13日18時39分発行